



第 152 号

二〇一七年一月二七日発行
発行者 奈良県立
橿原考古学研究所
奈良県橿原市畷傍町一番地
編集者 鈴木裕明

目次

当研究所附属博物館所蔵の伝智積寺泥塔について
小山二号墳出土鉄鍬に附着した赤色顔料
の蛍光X線分析
橿原考古学研究所研修記(下)
研究所催し物・附属博物館展示案内、海外交流

重見泰	1
小山倉誠子	4
奥山義	5
馬嶋玲	8
編集部	

当研究所附属博物館所蔵の伝智積寺泥塔について

重見 泰

一、はじめに

当研究所附属博物館(以下、当館)には経文を線刻した偏平宝塔形泥塔五点が収蔵されており(写真1、図1)、うち四点は一九九七年のリニューアル以降、常設展示されている。この度、この偏平宝塔形泥塔について調査する機会を得たので、その所見について報告する。

この泥塔は、昭和六〇年度に個人から購入した一一一点の泥塔のうち五点であり、出土地(遺跡名)は、伯耆国東伯郡以西村船山上(現鳥取県東伯郡)の智積寺とされている。この時の購入品は、『橿原考古学研究所年報』一二 昭和六〇年度、一九八六年に一覧が掲載されており、資料は当館で収蔵している。

二、伝智積寺泥塔の由来

智積寺出土とされる泥塔は各地で所蔵されており、現在までに七〇〇点以上が確認されている。この泥塔は、範型に粘土を押し当てる型抜きによるもので、片面にのみ偏平な塔形を作り出している。塔身部には梵字種子「カ」(地蔵)を陽出し、基礎部に『法華経』の経文一文字が線刻されているのが特徴である。

『以西村郷土誌』(旧趾 太千寺跡)によれば、この泥塔が多量に見つかったのは昭和一〇年のこととされる。京都大学所蔵の寄贈品に昭和一〇年のもの五点、昭和一五年のもの一八点があり、学会に初めて報告されたのが昭和一一年であるので、昭和一〇年頃に多量に掘り出されたものが、早い段階で分散しているよう

である。

この種の泥塔は全国に分散するが、その多くは当館の資料と同じく智積寺跡出土とされている。しかし、この種の泥塔が多量に出土した場所は、旧東伯郡以西村大字竹内字平塚(現鳥取県東伯郡琴浦町)にある字「佛隅(ホトケグマ)」であり、現在の智積寺からは勝田川を挟んで西に五〇〇m離れている。出土地は、太千寺跡と称され、智積寺の末寺跡とも伝えられるが史料はなく定かではない。文化庁文化財保護部による『全国遺跡地図』鳥取県(昭和五七年発行)には、大千寺遺跡(6-78)として登載されている。泥塔の出土地が智積寺末寺跡と称されることや、近くに智積寺があることから、一般に智積寺跡出土の泥塔と呼ばれるよ



写真1 当館所蔵の伝智積寺泥塔

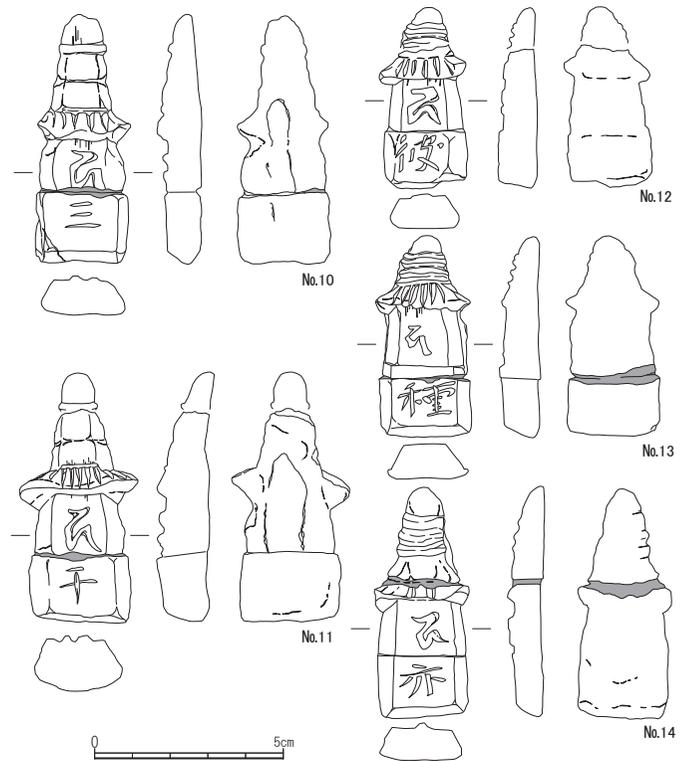


図1 当館所蔵の伝智積寺泥塔

うになったものと思われる。なお、現在の智積寺は、本来、七km南へ離れた船上山上に建っていたもので、約四〇〇年前頃に現地に移ったとされる。この種の泥塔の製作年代は鎌倉～南北朝時代と想定されており、智積寺との関連性は低い。したがって、名称として智積寺を冠するのは不適當であり、池上悟氏がいうように、地名から伯耆竹内泥塔などと呼ぶのが適當である。本稿では、便宜

的に伝智積寺泥塔と呼んでおく。泥塔は、「佛隈」に作られた高さ二～三尺（六〇～九〇cm）、面積三～四坪（一〇～一三㎡）の盛り土の中の窪地（一・五m四方）から出土しており、その窪地には石積みの形跡があったと伝えられている⁵⁾。現在でも径五m、高さ一・七mほどの墳丘が遺存し、その表面は人頭大の河原石で全面覆われているという⁶⁾。盛り土の周辺には、室町時代と思われる

小形の五輪塔の石材も数点確認されている。この遺構は、経文を線刻した泥塔を納めるための施設であった可能性が高いことから、経塚とみなしてよいだろう。

三、伝智積寺泥塔の観察結果（図1）

以下、観察した所見を述べる。資料の番号（No.10～14）は、『年報』一二の一覧に掲載された番号であり、その一覧の記載内容も挙げておく。

No.10 宝篋印塔 完形、基礎と塔身間接合。種子あり「仏」（？）「三」

塔身部と基礎部を接合しているほかに欠損部位はない。全長六・六cm、笠部幅二・四cm。相輪部は、上端に宝珠を表現するが、九輪は中央に一条のくびれで表現した簡素なものであり、下端部には露盤にあたる条線がある。笠部には、正面に四条、側面に各一条の縦の掘り込みがある。左側面のものには正面から掘り込むもので、笠型によるものではなく、乾燥前に直接切り込んだ可能性が出る。塔身部には梵字種子「カ」が陽出され、基礎部には焼成前に「三」が刻書されている。相輪部と塔身部には笠型の木目とみられる細かな縦筋が認められるが、基礎部にはない。裏面には粘土を型に押し込む際の継ぎ足し痕跡が認められ、とくに調整

は行わない。この粘土の継ぎ足し痕跡は塔身部のみで基礎部には続かない。型の深さは塔身部で七mmである。

No.11 宝篋印塔 相輪上半欠損、基礎と塔身間接合。種子あり「仏」（？）「干」

相輪部の宝珠部分が欠損しており、塔身部と基礎部を接合する。全長五・六cm、笠部幅三・一cm。相輪部は一条のくびれがあるだけの簡素なもの、下端部には露盤にあたる条線がある。笠部には、正面六条、側面各三条の縦の掘り込みがある。塔身部には梵字種子「カ」が陽出され、基礎部には焼成前に「干」が刻書されている。相輪部と塔身部には笠型の木目とみられる細かな縦筋が認められる。裏面には粘土を型に押し込む際の継ぎ足し痕跡が認められ、とくに調整は行わない。この粘土の継ぎ足し痕跡は塔身部のみで基礎部には続かない。型の深さは塔身部で七mmである。形態や成形時の痕跡などがNo.10と共通する。

No.12 宝篋印塔 相輪欠損（露盤わずかに残存）。種子あり「仏」（？）「彼」（？）

相輪部が欠損する。全長三・八cm、笠部幅二・三cm。笠部には、正面にの

み六条の縦の掘り込みがある。塔身部には梵字種子「カ」が陽出され、基礎部には焼成前に「彼」が刻書されている。裏面は、笠部と基礎部が少し低くなっており、塔身部よりも強く押さえて成形している。粘土の継ぎ足し痕跡はみられない。型の深さは塔身部で五mmである。

No.13 宝篋印塔 完形、基礎と塔身間接合。種子あり「仏」(?)「種」

塔身部と基礎部を接合しているほかに欠損部位はない。全長五・三cm、笠部幅二・五cm。相輪部は、上端に宝珠を表現し、九輪を条線で表す。笠部には、正面にのみ六条の縦の掘り込みがある。塔身部には梵字種子「カ」が、基礎部には「種」がそれぞれ焼成前に刻書されている。相輪部と塔身部の側面には成形時のバリが残る。型の深さは塔身部で七mmである。

No.14 宝篋印塔 完形、塔身と相輪間接合。種子あり「仏」(?)「亦」

相輪部と笠部を接合しているほかに欠損部位はない。全長六・一cm、笠部幅二・五cm。相輪部は三段の階段状になっている。笠部は低く、正面に縦二条の掘り込みがある。塔身部には梵字種子「カ」が陽出され、基礎部には焼成前に「亦」が刻書され

ている。相輪部には成形時のバリが残る。型の深さは塔身部で七mmである。

四、接合資料について

観察の結果、接合資料には一別個としてみた場合に不自然な点が多く、別個体の各部位を加工して接合したものと判断される。根拠は以下のとおりである。

- ①接合部分を境に、色調、胎土、焼成具合が変わる (No.10・13・14)。
- ②接合部分を境に、成形時の粘土継ぎ足し痕跡がなくなる (No.10・11)。
- ③接合部分を境に、厚みもしくは幅が変わる (No.13・14)。No.13は基礎部上部の接合であるが、幅や断面形態がまったく合っていない。
- ④接合部位が塔身部と基礎部の境にあたり、形態的にも成形技法の上でも割れにくい箇所であること (No.10・13)。
- ⑤割れ方(接合面)が直線的で不自然であること。
- ⑥接合された部位の組合せが類型には存在しない (No.14)。階段状の相輪部が接合されたNo.14の笠部は、

⑦確認のため、No.14の相輪部と笠部の接合を外したところ、割れ口に人為的な研磨がみとめられた。割

れ方が不自然であるほかの接合資料も人為的な研磨ののちに接合したものと判断される。

五、類似との比較検討

奈良国立博物館は一三七点の伝智積寺泥塔を所蔵しており、この度、類似調査としてこれらを観察させていただいた。その所見では、当館所蔵品と共通するデザインのものであり、これらの胎土や色調、成形時の痕跡などは当館所蔵品と類似することを確認した。このことから、当館所蔵品との同范関係にはないものの、両者は一連の遺物だと考えられる。

また、奈良国立博物館所蔵品のうち二点は接合資料であるが、これらも当館所蔵品と同じく、接合面を平たく研磨した別個体同士を接合したものである。焼成や胎土の状態から判断して、接合された各部位は、そのほかの資料と同じ一連の製品であり、それぞれ本物の可能性が高い。

不自然な接合状況からしても、一から模作したものとは考えにくい。これらの接合資料は、多量に掘り出された泥塔のうち、欠損しているものなかで大きさと色調などの特徴の類似するもの同士を選択し、割れ口を直線的に削って接合したと思われる。

六、まとめ

当館が所蔵する伝智積寺泥塔は、奈良国立博物館所蔵品と特徴が類似しており、同じ経緯で製作されたものと考えられる。その意味ではすべて本物である。しかし、接合資料に関しては、別個体を意図的に接合したものであり、その際には、相輪部と笠部の境や塔身部と基礎部との境といった部位の変化点に合わせて加工している点において、遺物整理作業等で行われる破片の接合と補填剤による通常の復元の域を超えている。全体的なデザインの参考資料としては有効であるが、これらは欠損したものの同土を補完して新たな「完形品」を作り出したものであって、一体的な一次資料として扱うことはできない。分析対象として扱う場合には、接合された破片それぞれを個別の資料として扱う必要がある。

註

- (1) 池上梧「伯耆赤碕出土の泥塔経」『考古学論究』第六 立正大学考古学会 一九九九年
- (2) 川勝政太郎「伯耆佛隈発掘の土版塔婆」『史迹と美術』七七八 史迹同致会 一九三六年
- (3) 前掲註(2) 川勝一九三六年

- (4) 前掲註(1) 池上一九九九
 (5) 前掲註(2) 川勝一九三六
 (6) 前掲註(1) 池上一九九九
 (7) 池上悟氏の分析および奈良国立博物館所蔵資料の観察結果による。
 前掲註(1) 池上一九九九

- (8) 奈良国立博物館『奈良国立博物館
 藏品図版目録』考古篇 経塚遺物
 一九九九、奈良国立博物館『古元
 道達―服部和彦氏寄贈仏教工芸
 展―』二〇〇七

小山二号墳出土鉄鏃に付着した 赤色顔料の蛍光X線分析

小倉頌子・奥山誠義

一、はじめに

小山二号墳は、太田遺跡第5次調査の際に確認された古墳時代後期の円墳である。棺内からは約一五〇本の鉄鏃が出土しており、それらの保存処理を行う過程で赤色顔料の付着が確認された。鉄鏃は錆の影響により全体的に赤味を帯びているが、顔料と思われる箇所は周囲よりも鮮やかな赤色を呈している。また、既往の調査では石棺の前棺内部において赤色顔料が検出されたとの報告があるが、鉄鏃が出土した奥棺および鉄鏃については顔料に関する情報が無い。そこで今回、赤色顔料が錆に由来するものであるか否かを確認するために、蛍光X線分析法による材料調査を実施した。

蛍光X線分析法は、試料にX線を照射した時に発生する蛍光X線のエネルギー及び強度から、試料に含まれる元素を特定する手法である。物質を構成する最小単位である原子は、原子核とその周囲を周回する電子により構成されている。原子にX線を照射すると、内殻にある電子が励起されて殻外にはじき出され、空孔ができる。この空孔に外殻の電子が遷移することで原子は安定する。この時に生じるエネルギーの差が蛍光X線として放出される。原子の持つエネルギーは固有であるため、蛍光X線エネルギーも原子により異なる。したがって、蛍光X線のスペクトルを測定することにより物質に含まれる元素の種類を特定でき、強度

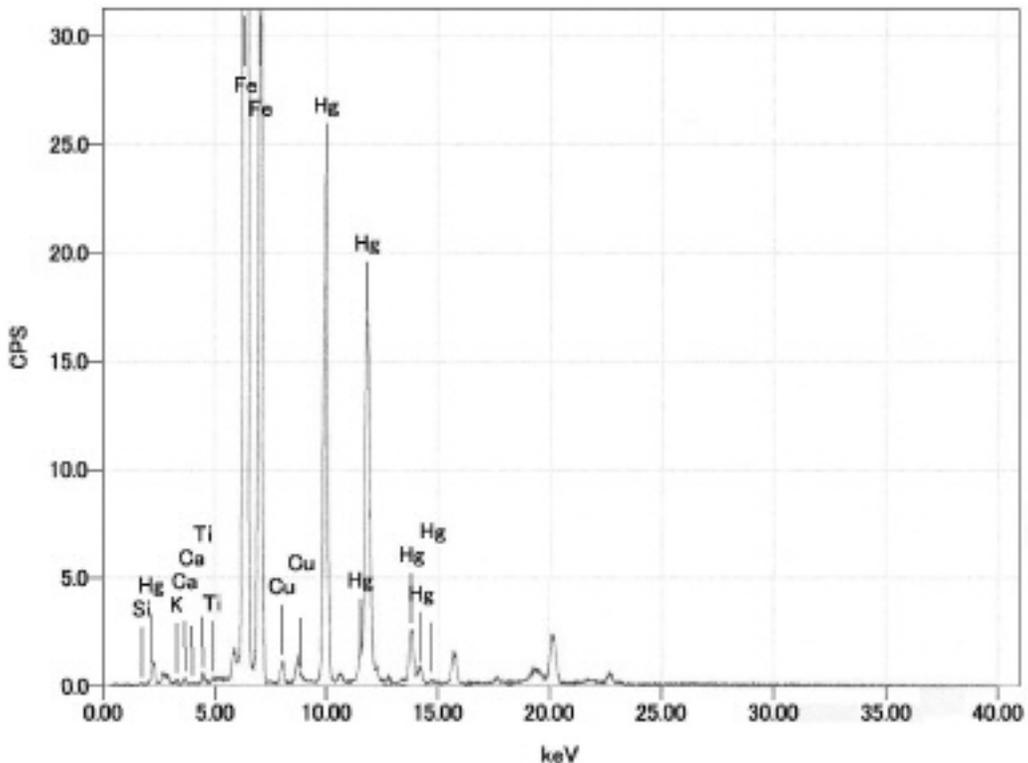


図1 蛍光X線スペクトル

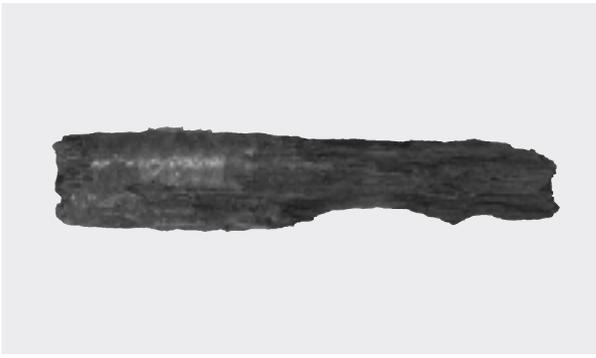


写真1 小山2号墳出土鉄鎌

からその含有量を求めることができる。

二、試料と方法

分析の対象とした試料は、小山二号墳奥棺の棺外東棺側より出土した鉄鎌九点である。矢柄には樹皮が巻き付けてあり、赤色顔料はその部分に見られるものが多い。分析には日本電子社製のエネルギー分散型蛍光X線分析装置JXA-3100RIIを用い、非破壊による測定を実施した。この装置のX線源はロジウム(Rh)である。測定にあたっては、X線を発生させるための管電圧を五〇kV(管電

流は自動調整、照射径を一mmとし、大気雰囲気下で一〇〇秒間測定を行った。

本装置は、ファンダメンタル・パラメータ法(FP法)による元素濃度の自動算出が可能である。FP法は一次X線のスペクトル分布や質量吸収計数、蛍光収率といった物理定数から理論的に元素濃度を計算する方法で、検出された全元素濃度の合計が一〇〇%となるように自動計算される。今回の分析は非破壊による表面分析であり、対象とする顔料の下層にある地金部が成分組成に大きく影響すると考えられる。したがって、今回は定量分析の結果については評価しないこととした。

三、結果

図1は蛍光X線スペクトルの一例であり、縦軸は一秒あたりの蛍光X線の検出数、横軸は蛍光X線のエネルギー値を示している。分析の結果、いずれの試料も素材である鉄(Fe)が最も多く検出され、次いで水銀(Hg)のピークが強く現れた。その他、珪素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン(Ti)、銅(Cu)などが僅かに検出された。試料は長期間土中に埋没した状態にあったため、これらは土壌に由来する成分と

考えられる。

わが国で古くから使用されている主な赤色顔料として水銀朱(HgS)、ベンガラ(Fe₂O₃)、鉛丹(Pb₃O₄)があるが、今回分析した鉄鎌より水銀が検出されたことから、鉄鎌表面に付着した赤色顔料は朱であると判断できる。

四、まとめ

今回の分析により、小山二号墳出土鉄鎌の表面に朱が付着していることが新たに判明した。赤色顔料が確認できた試料は九点のみであり、この朱が石棺に由来するものであるか

否か現時点では判然としない。しかし先述の通り、既往調査では赤色顔料に関する詳細な報告がなかったの、奥棺内に朱が塗布あるいは副葬されていた可能性を含め、今回の分析では有意な結果が得られたと考えられる。

参考文献

今尾文昭・西村匡広・奥田 尚・宮川 渉「北葛城郡當麻町太田遺跡第5次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報』一九七七年度(第三分冊) 奈良県立橿原考古学研究所 一九九八

橿原考古学研究所研修記(下)

寧夏文物考古研究所 馬 曉 玲

三、感想と収穫

①文化財保護と管理について

橿原考古学研究所での研修と各地の博物館・埋蔵文化財センター・遺跡公園の視察を通じて、日本は文化財保護と活用の面で、多くの経験を積み成熟していることを心底感じました。飛鳥歴史公園、飛鳥京跡苑池、平城宮跡歴史公園、馬見丘陵公園、熊本県立装飾古墳館、大阪歴史博物館、近つ飛鳥風土記の丘、新沢千塚古墳群公園、佐賀県吉野ヶ里歴史公園などの整備された遺跡公園が多くあり、古代の文化遺産が現代人の日常生活に完全に解け込んでいるように思いました。現在の中国で、いくつかの重要な大型墳墓と遺跡を発見し調査した後、遺跡公園として整備し、文化遺産の保護ができたならば、一般の人々にとってその地域の歴史



写真1 吉野ヶ里歴史公園見学風景



写真2 平城宮跡資料館見学風景

展示として非常にいいことです。しかしこのような構想は、中国の都市建設と経済発展の方向との間で矛盾が生じることがあり、その問題解決において、日本の文化財保護の理念は我々に多くの啓発を与えてくれます。

今回の私の研修の目的の一つとして日本の壁画墓の内容を理解したく、奈良県内の高松塚古墳とキトラ古墳および関連する展示を数回にわたり見学しました。高松塚古墳壁画は現地保存している過程で問題が生じ、そのため修復施設に運ばれて壁画修復保存のための作業が行われています。しかし一般の人々がこの作業のため、壁画を見ることができないというわけではありません。温湿度と空調が管理された修復室の外周の見学用通路から、見学者は大きな窓ガラス越しあるいは常備されている拡大鏡などを通じて本物の古代の壁画の修復・保存状況を見ることが出来ます。見学者はさらにタッチパネルを利用して古墳及び壁画の内容の解説をみることで、三次元の画像を通して壁画の細部も明瞭に確認でき、さらには壁画が劣化している状況も知ることが出来ます。これらから私が痛切に感じたのは、

日本の一般の方々とも考古学に従事する方々は運命共同体であり、これらの貴重な古代の文化遺産の保護と研究を進めていくなかで、共にその現状を把握できるよう努めていることです。

② 出土文化財及び調査資料の管理と活用

橿原考古学研究所での研修二日目に、私は研究所の遺物収蔵庫、写真・図面庫とそれらを管理する資料室を見学しました。遺物収蔵庫では、数層の収蔵棚に整然とコンテナに入った遺物が配架され、コンテナには遺物の内容を記したラベルが貼られ、そのデータはパソコン入力されて管理され、出土遺物の何がどこに配架されているか容易に検索できます。このような精緻な整理体制がとられていることと、それを継続するための作業が常時行われていることを知って、日本の埋蔵文化財に関わる人々の職業精神に心から敬服しました。後に日本各地の埋蔵文化財調査機関の視察のなかで、出土文化財についてはすべてこのような管理方法がとられていることを知り、どの機関においても、すべての出土文化財が安全な建物空間のなかで科学的な管理がなされていることを理解しま

した。発掘調査の写真・図面の整理・収蔵についても同様でした。

特に橿原考古学研究所の資料管理でみた、発掘調査報告書が刊行された後に、報告された遺跡の図面・写真が整然と整理され、空調管理された図面・写真収蔵庫に収められている様子が印象に残っております。出土文化財の管理と同様に、これらの資料もデータ管理され、容易に収蔵場所を検索することができます。

中国での私の仕事では、いつも膨大な量の出土文化財の収蔵管理の困難さに直面しております。今回の日



写真3 福岡市埋蔵文化財センター
見学風景

本での研修を通じて、私はこの方面でも得るものが大きかったです。今後の私の仕事のなかに活かしていきたいと思っております。

研究所図書室は膨大な蔵書があり、そこには多くの中国・韓国図書をはじめとする外国図書も含まれております。研修期間中の私の一つの作業として、私の専門分野に関わる図書を借り閲覧し、必要部分をコピーもしくはスキャンして資料化することがありました。これらの日本で得た研究資料は、私の今後の研究活動においてとても貴重なものとなるでしょう。

③日本考古学における大衆の参加について

考古学に関する絶え間ない活動によって、ここ数年来、中国の大衆は考古学分野の情報にますます関心をもっておりま。我々は大衆の考古学への関心・熱意を感じると同時に、インターネット上で疑問の声も耳にします。考古学分野の一面的な情報と大衆の知識の偏りがこれらの疑問に反映されているのですが、依然として我々と大衆の間での意志疎通の不足があることが最大の原因だと思えます。そこでここ数年来、中国考古学界では積極的にパブリックアー

ケオロジーを推進し、考古学調査の成果を最大限一般の方々に普及できるように努めています。

パブリックアーケオロジーに関しては、日本の考古学機関で行われている内容がとても素晴らしく、今回の日本での研修で、この点についても詳しくみる事ができ、今後の私の仕事の中で参考にできると皆さんの経験をさせていただきました。私が参加した中西遺跡では、発掘調査に参加を希望する一般の方々を募り、事前に研究所内で研修を受けた上で、実際に現場で調査を体験していただきました。参加された方々は一連の体験を経たことで、発掘調査の基本的な流れを理解でき、貴重な経験になったと思います。また埋蔵文化財に関わる仕事に理解を得、今後応援していただけることも期待できます。研修中には、私は何度も研究所が企画した一般向けの講演会に参加し、多くの方々が熱心に考古学研究者の研究成果を聴講している様子を見ました。

初めて訪れた国では、言語・環境・文化の違いで、生活と研修の過程でいくつかの困難に出会うことはよくあることだと思えます。しかし私は一〇ヶ月の研修期間中、いつも日本

の考古学関係者に、あるときは見ず知らずの人に親切に助けていただき、とても感激しました。生活と研修だけでなく、研究所の企画課の皆様には多忙な仕事のなかで、様々な面で私を気づかっていたいただきました。調査課と資料課の方々には発掘調査への参加や見学、図書閲覧などで本当に多くの援助をしていただきました。

多くの博物館や考古学機関を見学した時には、常にその研究員の方に整理室や収蔵庫などのバックヤードまで案内していただき、説明を受けて、それぞれの仕事の内容がよく理解でき、さらには関連書籍をいた

だきました。

④おわりに

一人で外出して駅や道中、買い物などでわからないことがあったとき、見ず知らずの方がわかりやすい日本語で私に話しかけ、とても親切に助けていただいたこともありました。

私にとって非常に印象深かったことが一つあります。中西遺跡の発掘調査に参加していたときに、一〇月のまさに稲刈りの時期で、木村所員と西川所員が私を連れて日本の稲刈り風景をみせてくれました。稲刈りをしていただいたご夫婦は私が中国から来



写真4 中西遺跡の発掘調査風景



写真5 稲束をプレゼントしていただいたご婦人と共に

たということを知って、とても温かく歓迎され、稲刈りの説明を熱心にしていただき、一束の稲を私にプレゼントしてくれました。そのとき私は日本に来て間もなかったのですが、日本人のもてなしと温かい心をとて深く感じました。

研修期間中、ここはきれいな空気と美しい山水がある国というだけではなく、ここに住む人達は礼儀正しく親切だと私は常を感じておりまを過ごしたことは、私の人生の中で最もすばらしい思い出となるでしょう。

日本で知った考古学の仕事の状況と方法、それから収集できた多く資料は、私の仕事にとって今後重要な啓発をもたらすと思います。私はこの国と人々をさらに深く知ることができました。最後に私に今回の交流の機会を与えて下さった榎原考古学研究所の菅谷所長をはじめすべての所員に感謝します。次は中国寧夏で皆さまとお会いすることを期待しています。

研究所催し物・

附属博物館展示案内

榎原考古学研究所創立八〇周年関連事業

第三七回奈良県立榎原考古学研究所公開講演会

『王権は移動したか』

― 纏向から柳本へ ―

共催：(公) 由良大和古代文化

研究協会

日時：平成二九年一月三日(金)

文化の日

会場：奈良県社会福祉総合センター

大ホール

内容：

「黒塚古墳の最新研究成果」

奈良県教育委員会文化財保存課

課長補佐 岡林 孝作

「纏向遺跡と纏向古墳群からみた

初期ヤマト王権と黒塚古墳」

桜井市教育委員会文化財課

課長 橋本 輝彦

「東アジアにおける初期ヤマト王権

と黒塚古墳」

当研究所 所長 菅谷 文則

秋季特別展 (開催中)

『黒塚古墳のすべて』

開催期間：平成二九年一〇月七日

(土) ～ 十一月二六日(日)

研究講座：

第二回 一〇月二九日(日)

(銅鏡をめぐる諸問題)

「黒塚古墳出土鏡の意義」

当研究所資料課 係長 水野 敏典

「黒塚古墳とヤマト王権保有の銅鏡」

大手前大学総合文化学部

第三回 十一月二日(日)

教授 森下 章司

(鉄製武器・武具)

「古墳時代前期出土刀剣の諸問題

― 黒塚古墳出土刀剣を通して ―

当研究所企画課

主任研究員 持田 大輔

「鉄の威風―武装からみた

黒塚古墳とその時代」

京都大学大学院文学研究科

助教 阪口 英毅

特別陳列

『十二支の考古学 総集編』

開催期間：

平成二九年二月二六日(土)

～平成三〇年一月一四日(日)

海外交流

◇中国寧夏文物考古研究所研究員受

入事業

受入研究員：王 宇氏

期間：平成二九年六月一六日

～平成三〇年四月中旬(予定)

◇海外技術研修員受入事業(国際課

事業)

受入研究員：孫 麗娟氏

(中国陝西省西北大学文化遺産学院)

期間：平成二九年八月三日

～平成三〇年一月二八日

◇奈良県・陝西省戦略的専門分野交

流事業(国際課事業)

派遣職員：米川 裕治所員

派遣先：陝西省西北大学文化遺産学

院・陝西省考古研究院

期間：平成二九年一月中旬

～平成三〇年三月中旬(予定)

◇韓国国立文化財研究所との交換研

修事業

派遣職員：絹島 歩所員

期間：平成三〇年一月～三月(予定)

受入研究員：南 浩鉉氏

(国立江華文化財研究所)

期間：平成三〇年一月八日

～三月九日(予定)